

実力テストにみる長野高専 3 年生の英語力の問題点

中村護光^{*1}, 小澤志朗^{*2}, 奥村信彦^{*3}, 富永和元^{*4}, 高桑潤^{*5}

English Proficiency Weaknesses among Nagano Kosen 3rd year Students Results of the National Center Test

NAKAMURA Morimitsu, OZAWA Shiro, OKUMURA Nobuhiko,
TOMINAGA Wagen and TAKAKUWA Jun

Student evaluation of their ordinary lessons is now becoming common practice. Based on learners' observations, teachers have responded by developing better methodologies. In addition, schools strive to meet the requirements of accreditation boards, which, on the surface, provide a good level of education.

However, what matters to students, their parents, and companies, not to mention society in general, is whether students have actually acquired practical knowledge and skills as a result of all those efforts. It is natural that the question be asked, and accountability is absolutely necessary.

For the past five years, we have collected and examined data in order to better evaluate our students' English ability by means of proficiency tests. Last year, we gave our third-year students the National Center Test. In this report, we identify and analyze the students' weak areas as revealed by their test results.

キーワード : English proficiency test, accountability, Nagano Kosen

1. はじめに

学生アンケートによる授業評価が各高専で実施され、それに基づいた教員の授業改善の取り組みが熱心に行われている。学生がベストの状態で勉学できるように授業方法を工夫し、カリキュラムの整備、学習環境を整えるといった教える側の accreditation は一応の成果を挙げているのではなかろうか。しかしながら、教育改善はここで止まることはないだろう。授業を受ける学生や保護者、高専生を受け入れる企業や社会にとって問題なのは、「学生がそのような経過を経て本

当に力がついたのでか」という問ではあるまいか。この問への accountability (説明責任) が求められても当然であろう。

何を基準として実力を測るかについては、さまざまに議論があるところである。いずれにせよ、市場や生産の global 化に伴って、高専には工業技術分野で国際競争に耐えていける創造的な技術者の育成が求められていることは確かであって、技術者として、研究者として、広く社会のリーダーとして状況の変化に柔軟に対応していける土台である学問的素地を修得させ卒業生を送り出すことは、国立を冠する高専の国民に対する責務であろう。

この学問的素地の修得は現在どのように測定されているのであろうか。長野高専の学生にとって、従来から自己の学力判断の拠り所は定期試験である。中・上級生になると、大学への編入等にあたって学校推薦

- *1 一般科 教授
- *2 一般科 教授
- *3 一般科 教授
- *4 一般科 准教授
- *5 一般科 准教授

原稿受付 2008 年 5 月 2 日

に値する成績を得るために、試験の得点にはかなりナーバスになる。定期試験の結果がすべてにものをいうのである。しかし、ここで問題なのは、定期試験での得点を自己の教科の実力と錯覚してしまうことへの危うさである。大方の定期試験は出題範囲が限定され、ボーダーラインを60点に設定し、基本事項の定着の確認を主としながら、平均70点台となることを想定したものである。この種の試験の欠点は、学習内容を深化させ、学生に多様な応用力を大胆に試すことが出来にくいということである。多くの学生にとって、定期試験は、日常の予復習や、入念な準備等がなくても対応できる一過性の勉強の機会が終わってしまっていると思われる。このことは、学生の家や寮での自宅学習時間の少なさから容易に推測が可能である。

若者の成長は、夢や希望に向かい、現在より一段高いところに次の目標を置いて、考え、工夫し、努力し、チャレンジする向上心であり、彼らの潜在的な能力を引き出し、そのように導いてやろうとする指導者の姿勢にあると考える。話をより具体的にするために、教科を英語に例をとってみる。残念ながら、本校での英語学習については、昨今、4,5年次になって、自発的に外部の資格試験に挑戦する者の数は少なからず増えてはきているものの、多数の学生にとっては定期試験に備えた教科書の理解に止まってしまっている傾向にある。地道に積み上げた、持続可能で、活用できる学力とは違った、揮発性の高い学力でとまっている。

私共教員についての問題もある。授業改善に努力を払い、基礎力の定着、学力の充実に意を注ぎ、無事学生たちの科目の単位認定が出来ても、担当した科目の単位認定が果たして学生に期待される学力の標準値を満たすものであるか、そのレベルまでの学力を学生に修得させているか自問自答してみることはめったにない。国際的な英語力の比較はともあれ、高専とは別トラックの他教育機関で学ぶ同年代生との相対的学力の比較の中で本校学生の実力の程度について思い巡らすことは稀である。

残念なことに、定期試験が示す得点は、必ずしも学生の持続可能で活用できる学力をあらわす数字になっているとは言いがたいのである。

以上のような反省から、本校英語科担当教員は、過去5年間にわたり、定期試験とは別に、一斉の実力試験を実施し、冒頭の問いに対する答えを求め、その結果について考察・反省し、教科指導の中に生かそうと

努めてきた。本稿では、この取り組みの一環として、平成19年度3年生に実施した実力テストの結果について報告する。

2. 長野高専における英語実力テストの実施

本校では、年2回の実力テスト日(4月,9月)を設け、全学生が参加している。学校の年曆に載る全校あげての実力テストは平成19年度で3年目となる。英語科はその都度、全学年(1回目は1年生が、2回目は5年生が除外される)を対象に実施してきた。出題内容は、各年度第1回目は語彙・文法・表現力の基礎事項に関して1年生を除いた2~5学年に共通の問題を課し、英語の基本言語材料の定着度を経年的にモニターしている。年度第2回目は1,2年生が独自テスト(夏休みの課題テスト)、3年生は外部業者による診断テスト、4年生はTOEICを受験させ、英語運用力の現状を把握している。3年生の英語については本校が全校の実力テスト日を設定した以前から英語科独自で3度実施してきているため、計6年連続で実施している。ただし、19年度は従来のテストと違い、平成19年度の大学入試センター試験問題(英語;筆記試験)を用いて、学生の英語力の現状と問題点を探ってみた。理由は、同テストの問題が学習指導要領に基づいて作成され、標準的学力を測定するに適切であること。また同年代のより大きな母集団と比較対照が可能である点である。

3. 平成19年度3年生対象英語実力テストの実施概要

3-1 実施日

平成19年9月5日(水)9:20-10:40(80分の筆記試験,解答はマークシート方式) 校内第2回実力テストの時間割の中で実施した。

3-2 対象

第3学年,受験者 187名(在籍学生数192名内1名休学,4名欠席)

3-3 試験内容

平成19年度大学入試センター試験の外国語(英語)の筆記試験と同一問題を使用した。200点満点で、高等学校英語 , , オーラルコミュニケーション , の履修レベルの問題である。

3-4 結果

表1の通りであった。

実力テストにみる長野高専 3 年生の英語力の問題点

表 1 平成 19 年度 3 年生対象英語実力テスト結果

	M 科	E 科	S 科	J 科	C 科	本校 3 年生	センター試験
受験者数	40 人	38	40	34	35	187 人	503,823 人
平均	81.5 点	77.6	92.8	104	76.0	86.1/200 点	131.08/200 点
最高	151 点	144	182	172	168	182/200 点	200/200 点
最低	31 点	26	45	46	46	26/200 点	0/200 点
標準偏差	27.6	25	31.1	30.8	21.6	29.0	40.35

(注) M 科は機械工学科, E 科は電気電子工学科, S 科は電子制御工学科, J 科は電子情報工学科, C 科は環境都市工学科の本校での略称である。

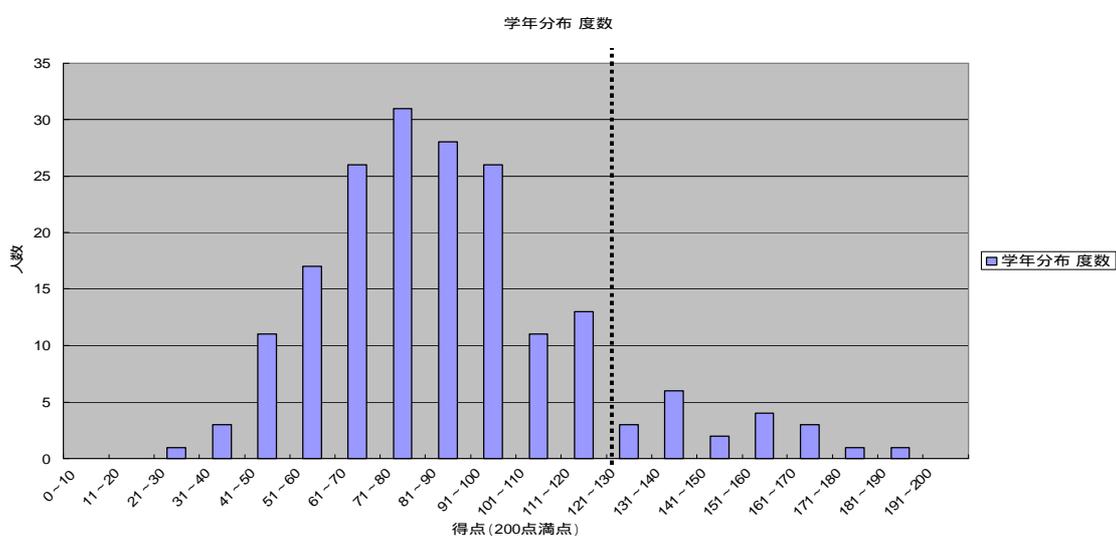


図 1 学年度数分布

3 - 5 本校受験者の得点分布

上の図 1 の通りであった。図中の破線はセンター試験での平均点を示す。

本校 3 年生の得点平均はセンター試験の全受験者平均点の 65.7% であった。得点の分布状況は、61 ~ 100 点の間、すなわち、全問題に対する正答率が 30% ~ 50% の間に 111 名、本校受験者の 59% がこの帯に集中した。センター試験の全受験生の平均点を超えた得点者は 187 名中 17 名で、本校受験者全体の 1 割弱であった。

3 - 6 概評

センター試験は通常 1 月に実施され、本試験の実施月の 4 ヶ月後に行われるものである。センター試験の受験生は自分の進路決定を大きく左右するセンター試験に向け十分に準備しており、またその学習動機と勉強量は本校 3 年生に比べ格段に違うことなどを勘

案すると、彼らとの得点の差は我々の想定内であった。しかしながら、センター試験の英語の出題範囲が、英語、オーラルコミュニケーション、に加えて、英語とオーラルコミュニケーションに共通する問題という、すでに本校学生も履修した範囲から出題されているものであることを考えると、現実に表れてきた本校生の得点を前に、日常の教育のあり方をあらためて考えさせられることになった。

今回のテストにおいて、一体どの分野に本校生の弱点が見られ、かつ、センター試験の受験者との差ができたのかを探ってみた。

4 . 出題内容と解答にみられる特徴

4 - 1 出題のねらい

大学入試センター試験の筆記試験各問の出題のねらいは以下の通りである。

第1問(解答番号1~8): A(解答番号1~3): 単語を正しく発音しているか。 B(解答番号4,5): アクセントの位置を正確に把握しているか。 C(解答番号6~8): 事柄のポイントをおさえて、文章を読んでいるか。

第2問(解答番号9~28): A(解答番号9~19)語彙力(単語, 慣用句等)が備わっているか。 B(解答番号20~22): 対話文で適切に受け答えの表現ができるか。 C(解答番号23~28): 文法の規則を簡単な文の中で応用できるか。 文型・構文にのっとりて文を構成できるか。

第3問(解答番号29~36): A(解答番号29~30)まとまりのある文章を読み, 不明の表現を推測できるか。 B(解答番号31~33)ディスカッションの流れから参加者の主張を読み取ることができるか。 C(解答番号34~36)話の筋が通るように, 前後関係から判断して, 正しく文を挿入できるか。

第4問(解答番号37~41): A(解答番号37~39)グラフ, B(解答番号40~41)広告等の説明から適切に情報を受信できるか。

第5問(解答番号42~45): 会話のやりとりから, 必要な情報, ポイントをつかみ, 具体的に状況をイメージできるか。 A(解答番号42~43)電話でのやりとりの内容と, 女性の服をイメージできるか。 B(解答番号44~45)会話からゲームのやり方をイメージできるか。

第6問(解答番号46~53): 長文を読み下し, A(解答番号46~50): 必要な情報の把握, B(解答番号51~53)全体の概要把握ができるか。

4-2 全解答分野の正答率

本校3年生の問題解答分野別の正答者数の割合は, 次の図2が示す通りであった。正答者の数が50%を上回った解答分野は15分野中, 3分野である。

4-3 正答率の低い(30%未満)解答分野と問題

試験における解答番号は全部で1番から53番までである。多くの学科で, 受験者の正答率が全体の30%を割った問題は, 次の表2の通りであった。数字はクラス全受験者の中の正答者の割合である。

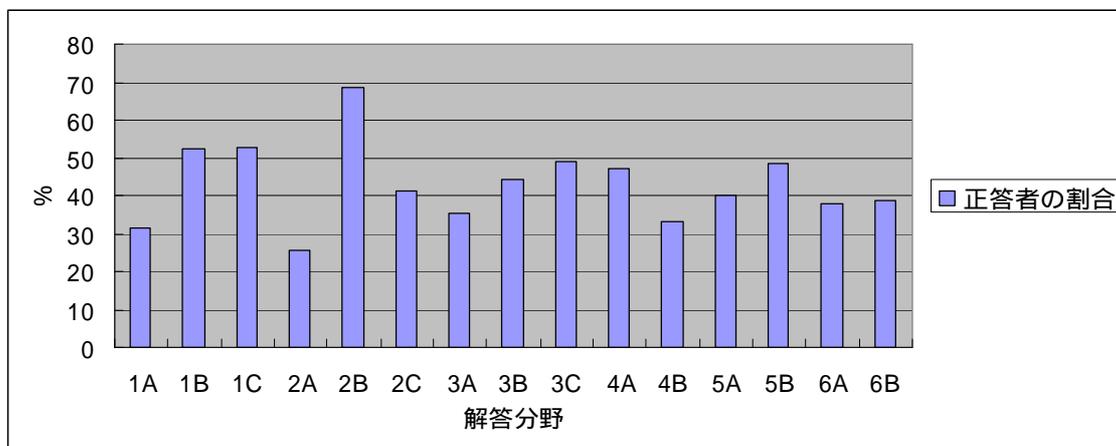


図2 全解答分野の正答率

表2 正答率の低い(30%未満)解答分野と問題

解答分野	1 A		2 A					3 B	6 B	
	1	2	11	13	16	17	19	31	52	53
M科	27%	7%	10%	5%	17%	17%	10%	29%	24%	17%
E科	20	3	8	8	20	23	20	13	25	25
S科	20	5	10	13	5	20	18	25		
J科	29	6	6	14	14		11	29		
C科	25	0	3	19	17	25	11	19	27	

51-52-53 は、5,7,8 の選択肢の解答が 51,52,53 のどこに入ってもよいという答え方である。正答率の低い解答番号は第 1 問と第 2 問に属するものが多数を占めた。

4 - 4 正答率の高い(60%以上)解答分野と問題

正答率の高い解答番号も第 1 問と第 2 問に属するものであった。下の表 3 に示してある通りである。

4 - 5 誤答が集中した問題

正答が得られず、誤答となる特定の選択肢に答えが集中した例が下の表 4 である。誤答の選択肢番号(の中の数字)とクラス全体の受験者の中で、その番号を答として選んだ学生の割合(%)である。解答番号 1 は assure, classic, efficient, social の単語の下線部の発音が、解答番号 2 は abroad approach coast throat の単語の下線部の発音が、他の 3 つと異なるものを選びさせるものである。解答番号 1 では、摩擦音に属する子音を、解答番号 2 では 2 重母音の発音を間違えている。解答番号 7 の問題は設問において、話者が太字で示した語を強調して発音した場合、話者が伝えようとした意図はどれが最も適切かを選択するものである。

What do you think about my summer plans?

I already know what your friends think.

I didn't understand what you just said.

I know what you think about my winter plans.

Your plans are good. How about mine?

内容に沿った読み方をする。聞かれたことに的確に応答できるという点で How about mine? の不自然さが十分認識できていなかったと考えられる。

解答問題 11 は空所に入れるのに最も適当なものを

選ばせる問題である。

Small children have teeth which usually fall out between the ages of five and twelve, after which they get their teeth.

false forever general permanent
誤答からみるとおそらく、文の意味はつかんでいると考えられる。しかし、単語の使い方(副詞、形容詞)について理解不十分である。解答問題 13 も 11 と同じく空所に入れるのに最も適当なものを選びさせる問題である。

My sister is in the front row in the picture. She is the one in her hands.

of everything of some things with anything with nothing

正答は であるが、多くが を選択した。意味をよく考えることなく、one of ...の口調に引かれて答えたようである。また、代名詞 one が理解できていないためとも考えられる。

表 3 正答率の高い(60%以上)解答分野と問題

解答分野	1 A	1 C		2 B	
解答番号	問 3	6	8	21	22
M 科		66	63	71	66
E 科	60	68	65	65	75
S 科	73	65	65	73	83
J 科	80	77	63	74	86
C 科				75	69

表 4 誤答が集中した問題

解答分野	1 A		1 C	2 A		6 B
解答番号	1	2	7	11	13	51-53
正答						
M 科		61	61	71	68	53
E 科	58	58	55	68	55	59
S 科	55	58	68	60	55	68
J 科	57			63	60	60
C 科	58	69	61	72	50	61

解答番号 51-53 の問題は、長文を読み、内容と合っているものを 3 つ選ぶ問題である。ここで の答えが多かったが、 は Grandpa went to the zoo especially to see Snowflake. であり、本文では、Grandpa が We had come especially to see the famous works of art, but one day just for a change we went to the zoo. と述べている。Especially や for a change の手がかりとなる表現がわからなかったが、それを見落としているための答えであろう。

5. 結果の考察

実力テストの予告については、前もって試験時間が 80 分、出題範囲は英語、の既習分野であるとアナウンスし、夏休み中に教科書の総復習をしておくよう指示した。ただし、大学入試センター試験を使用することは伏せておいた。これらの科目に関する教科書は、本校では、1,2 年次に三省堂 Crown、を使用している。また 3 年次は東京書籍 Prominence English Reading を使用中であり、いずれも文科省検定済の教科書であり、全国の大学進学をめざす高校で広く使用されている。教材の点では、大学入試センター試験を受ける高校 3 年生とは、なんら変わることがない。しかしながら、60 分で、出題範囲が指定された定期試験に慣れた本校の学生にとっては、この種の総合的で、範囲を定めない、分量の多い問題を 80 分にわり取り組まねばならない機会はまれであり、不慣れであるハンディはあった。

結果としては、会話文の対応表現、まとまった文章の理解、長文の内容把握の運用能力を問う問題の正答率に比べ、発音、語彙語句、文法・構文力を問う問 1、2 に正答率の低い答が集中した。このことは、言語材料の蓄積とケースバイケースに対応した基本的言語材料の活用力が欠如していることを示すものであった。本校 3 年生は、総じて、日常生活に対応できるレベルでの英語的センスを有し、事柄の内容を大雑把に捉えることのできる力を有している反面、言語材料の定着に不安があり、基礎的語彙や文法事項の活用力に欠けている。また、文章の正確な理解と状況を的確に把握する力が不十分であった。つまり、key points を抑えた理解、筆者の意図を理解するなどの、より深い読みが今一步である。履修歴はあるが、表面的な学習に

終始し、予習といった自学自習で培われる問題意識・critical thinking を持った学習態度や、演習により修得される応用力の不足が、センター試験の受験者達との得点差を生じさせたと考えられる。

6. おわりに

センター試験の母集団はこの日に備え、何度となく校外の模試により傾向と対策の受験テクニックを会得し、長期間にわたって十分に準備してきたモチベーションの高いグループであることを考えると、彼らの英語力との単純な比較は酷である。しかしながら、結果が表す数字の現実には現実である。標準問題で多くが正答率 50% を割っているのである。また同世代の高等教育を目指す生徒とは、今後 4 ヶ月の間に急速に力をつけていくことがない限り、この英語力の差を持ち越すのである。

今回のセンター試験利用による実力テストから、スピーチ、プレゼン、ディベートを通じ高専生のコミュニケーション能力を向上させる運動が展開される一方で、多くの学生には語彙力、文法力にみられる基礎力を鍛えて定着させ、また学習量をこなして応用力をつける指導が、まだまだ必要であることを痛感させられた。実力の土台は学生自身の日常の着実な予習・復習という自学自習の習慣の中で醸成される。このために、低学年から、この自主自立的学習習慣の確立と演習量の確保による基本的言語材料の蓄積・定着が本校における英語教育の大きな課題であることがわかった。

また教科書同様に、学校の教務システムにおいても、真の学力と育成について考えるべきであろう。このことについて、学生に如何に動機付けし、実践していくかは、簡単な課題ではないが、学校全体で取り組み、整備していくべきである。こと英語に関しては、卒業生を受け入れる大学や企業からの「高専卒業生の英語力は、決して芳しくない」との評価に甘んじている。このような現状は英語に限ったことではないと思う。いずれにせよ、学生の実力を正しく評価し、その実力をもって、校外への推薦等が考慮されてもよいのではないだろうか。それが、学校が社会に示す accountability であると考えている。